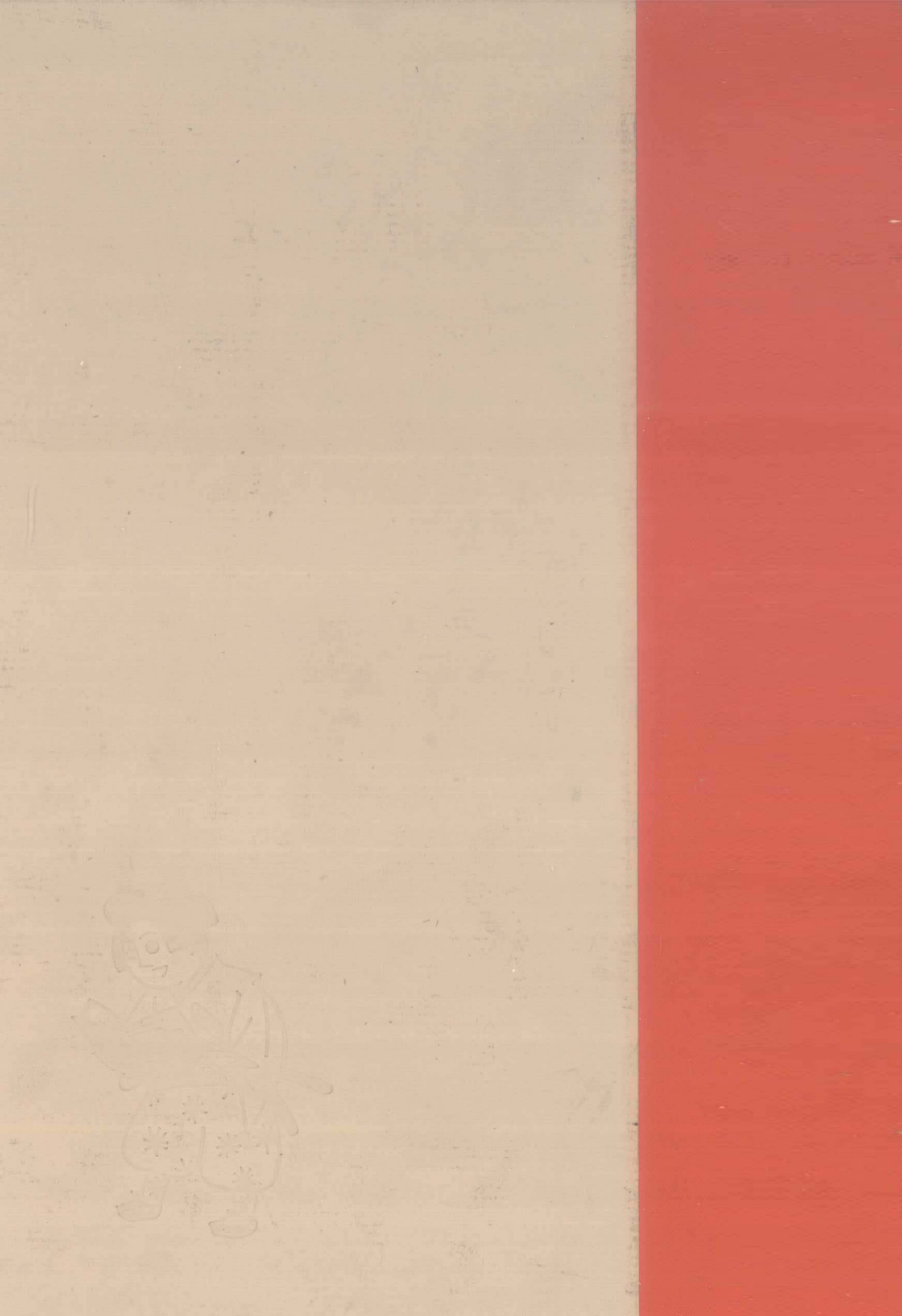
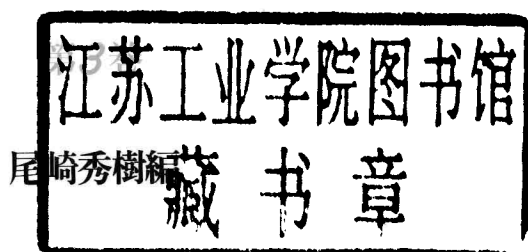




少年小説大系

山中峯太郎集



三一書房

少年小説大系 第3巻

山中峯太郎集

一九九一年六月十五日 第一版第一刷発行

尾崎 秀樹

監修者 小田切 進

紀田順一郎

発行者 畠山 滋

発行者 株式会社三二書房

〒113 東京都文京区本郷2の11の3

☎03(3812)3131

振替東京9―84160

印刷 株式会社 新栄堂

晝美術印刷株式会社 (扉・口絵・函印刷)

製本 株式会社 鈴木製本所

製函 高田紙器

落丁・乱丁本はおとりかえいたしません。

©一九九一年

ISBN4-380-91548-4

Printed in Japan

山中峯太郎集——目次

敵中横断三百里 ^{てきちゆうおうだん}	七
亜細亜の曙 ^{アジア あけぼの}	五九
黒星博士 ^{くろほし}	二九
見えない飛行機.....	三五
団子二等兵 ^{だんご}	四九
解説〔尾崎秀樹〕.....	五五
年譜〔瀨名堯彦〕.....	五九

凡例

- 一、本大系のテキストは、原則として初出の雑誌掲載のものに準拠した。
- 一、本大系は、すべて現代仮名づかいにあらため、漢字は原則的に新字体で統一し、拗促音を使用した。
- 一、明白な誤植、脱字、衍字と思われるものは、これをあらためた。
- 一、難読漢字には、適宜ルビを補った。
- 一、カギ括弧、句読点等の用法は、全巻にわたって統一をとった。

山中峯太郎集

少年小説大系

3

敵中横断三百里

てんきちゅうおうだん

り

日本軍あやうし

神武天皇が国を建てたもうて、紀元まさに二千五百六十四年のとき、わが「日本」の力が、大いにふるい起こつて世界の強国となるか、あるいは、東洋のすみのよわい小国で終わらねばならぬか、どちらかにきまるといふ一大困難にであつたのが、日露戦役である。いまでこそ「日露戦役は勝つた」と、だれもみな、ただそう思うだけでも知れないけれども、「勝つ」……「最後まで勝つ」……「どうしても勝たねばならぬ」と、この勝利のためには、かしこくも、

明治大帝をはじめたてまつり、全国民が上下一心になつて、「日本」ぜんたいで露国にぶつかつてゐた、それだからこそ、実はようやく勝つたのだ。「日本」にあるだけの力を出しきつて勝つたのが、日露戦役だ。だから、戦争の最後のときには、国内に兵隊の数が、なくなりかけてゐた。年のよつた後備兵まで、みなが出征してしまつたのだ。——このうえもう戦はできないぞ。と、そういうあぶないところまで、「日本」は力を出しきつたのだ。

この「日本」の陸軍のあぶないところを、露国では見ぬいてゐたのだ。露軍ははじめ朝鮮国境の鴨緑江で、日本軍と一戦をまじえると退却した。それからほうほうで、戦しながら退却しつつつて、満州の遼陽の激戦にも退却した。しかし、一度でも「負けた」とはけつして、い、わ、ない。露軍総司令官のクロバトキン大將は、世界第一流の軍略家として名高い將軍だ。露軍が退却するたびに、將軍は世界にむかつてこういつた。

「まけて退却したのではない。わが露軍は、予定の退却をしたのだ」と。

しからば「予定の退却」とはなににか？ 日本軍に損害をあたえながら、わざと退却する。退却して日本軍を満州のおくの方まで、長くひっぱつてくる。すると、日本軍の兵数はすくないから、最後には力を出しつくしてしまふ。それにくらべて、露国の兵数は全国から集めると、はるかに多い。いくらでも新手の精兵を、本国から満州へ送つてくる。そこで、はじめは「予定の退却」をつづけ、日本軍が最後の力を出しきつたところへ、こんどは露軍から大攻撃を加える。すなわち、日本軍を満州のおくで、ふたたび立てないまでをやつつけようという、これが、クロバトキン將軍の大軍略だつた。

日本軍あやうし！ いまは国内に後備兵までなくなりかけた。しかるに、露軍はいまや優勢になつた。本国からあたらしい精兵を、シベリヤ鉄道でドシドシと送つてきだした。列車が引きかえてゐては単線だからまにあわない、というので、送つてきた列車を、到着した駅でみな焼きすてる。思ひきつたやり方である。こうして優勢な兵力を満州に集めて、軍略家のクロバトキン將軍は、いよいよ大攻撃を断行しようとするのだ。ああ日本軍あやうし！

このとき、両軍の戦線は「沙河」という川をはさんで、四十余里の長さに延びてゐた。たがいに塹壕をきき、両方からにらみあつてゐる。その兵数八十五万、これを「沙河の対陣」という。しかも日本軍の兵数には、すでにかぎりがある。露軍は日に日に大きくなってくる。わが総參謀長の児玉源太郎大將は、毎朝早く、總司令部を出て近くの岡へ、一人で歩いてゐた。

——日本軍あやうし！ わが祖国日本をまもらせたまえ！ と、太陽を毎朝おがみにゆくのだ。太陽は日本の国旗だ。それほど総參謀長が苦心するまでに「沙河の対陣」は、日本軍にあやういのだ。おりしも明治三十八年一月二日、待ちに待つてゐた一

大吉報がきた。なにか？

天險の要害たりし旅順要塞の陥落だ！ この大吉報によって「沙河の対陣」の日本全軍が、歓呼の声をあげた。満州の原野もためにふるわんばかり、日本軍の意気まさに天をついた。

「乃木軍がくるぞ！」

「名將乃木希典閣下が、第三軍をひきいてこられるぞ！」

「万歳——！」

全軍の意気、すでに敵をのむ。ここにおいてか、総司令官大山巖元帥は、乃木軍のくると共に、対陣をすてて総攻撃断行の大決心をかためた。

敵將クロバトキン大将の心中はどうか？ かれは旅順陥落の報をきくや、しずかにつくえをたたいて参謀たちにいったそうだ。

「要塞は陥ちるべきものだ。将卒にけつして落胆させるな。敵に乃木軍の加わらざるうち、総攻撃を断行しなければならぬ。全軍攻撃準備の命令を作れ！」

かれも総攻撃を断行し、われも総攻撃を断行せんとす。しかも、われは乃木軍のきたるを待ち、敵は乃木軍のきたらざる前に、撃つて出ようとする。乃木軍よ！ 一日もすみやかに沙河へきたれ！

かくて決戦の時機、日々にせまる。このとき、沙河の戦線における日本軍は、東から西へかけて黒木大将の第一軍……野津大将の第四軍……奥大将の第二軍、そのほか、川村大将や立見大将などのひきいる軍が、東西四十里にわたって陣をしいている。この大戦線の西の端をガッチリ守っているのが、秋山少将のひきいる大騎兵团だ。この騎兵团とにらみあっているのが、勇無比と世界に聞こえる露軍のコサック騎兵团だ。両騎兵团の第一線が、刃もこおる満州の嚴寒一月の原野を、昼も夜もた

がいにおこたらず守備している。

いいよ、この総攻撃の決戦をはじめる前に、わが総司令官がぜひ知らなければならぬことは、敵軍の背後の状況である。目の前に対陣している四十里にわたる戦線のようにすは精細にしらべてあるのでよくわかるが、その後ろに、どれほどの兵力があるのやら、どこへ主力をくばっているのやら、どの方面からどの方面へ兵隊を運んでいるのやらは、遺憾ながら正確にわかっていない。これがわからぬとわが軍では、総攻撃を断行する策戦上非常に困るのである。

しからば斥候を出してさぐったらいではないか。まさにそのとおりである。だが思うてもみよ。敵の陣地は幾重に重なっているのかもわからない。わずか五、六騎の斥候が、敵の目にふれぬように敵陣を突破し、横断し、その背後に出て精細に偵察するということは、鬼神といえどもおぼつかない危険な仕事である。十が十までは生きてふたたびかえることのできない冒険である。しかしながらなんとという輝かしい冒険であろうぞ。もとより一命を君国にささげて出征した、ますらおたちである。ねがわくはその大命のわれに下れかしと、祈らぬ将校とてなかつたのである。

かかるとき、わが全軍総司令官から秋山少将のもとへ、秘密命令を参謀が持ってきた。

この総司令官の秘密命令こそ「敵中横断三百里」決死大冒険の起こりだ。

おたけびする全身の熱血

「どうだ？ コサックのやつ、そろそろ動きだしたようじやないか？」

「ウム、くるかな。きたら一あわふかしてやるさ。今日は第一線のようすが、みようにさわがしかったぞ」

「くるといいなあ。おれはもう、対陣はあきてしまったぜ」

「なあに、乃木軍きたらばただちに総攻撃だ。コサックの手なみを一つ拝見とゆくさ。いまに見ろ！ もうすぐだ」

腕が鳴る。じつに腕が鳴る。秋山騎兵団の中の騎兵第九連隊、その青年将校たちが、いましも第一線から交代して帰ってくる、家屋の中で、——敵のコサックきたらばきたれ！ 日本刀の切れ味をおみまいもうそう！ と、今日の第一線の敵のようすがあやしいのを、とても嬉しがって話しはじめたのだ。騎兵の戦闘は襲撃と襲撃の衝突だ。馬上の白刃戦だ。小銃を持っているが、射撃するときは少ない。世界に名高い敵のコサックに、三尺の秋水日本刀の冴えを見せたいのだ。

「オイ、やりたいなあ！」

「まあ待て待て！ いまに見ろ、いまにだ、ハハハハ」

そういつてるところへ、一人の兵卒が外からくると、入り口に立ちどまつていった。

「建川中尉殿！ 連隊長殿がお呼びであります」

「なに、連隊長殿が？ よし」と建川美次中尉はスツクと立ちあがった。

ほかの将校たちがそばからいいだした。

「なんだなんだ？ 敵が第一線へやってきたんじやないか」

「くればいいがなあ。建川、連隊長殿からなにかうまい物をもらってこい」

「もちでもないぞ」

「ハハハハ、もちか。あつたらもらってくるよ」と、建川中尉は快活にわらいながら、兵卒といっしょに外へ出た。

二月前まで建川中尉は少尉だった。連隊長の平佐春弼中佐の

そばで、名譽ある軍旗をまもっていたのだ。中尉になったばかりの新任中尉だ。

（旅順も陥ちたし、連隊長殿が、もちでもくださるのかな？）

と思つて、その連隊長室へはいつて敬礼すると、

「オオ、待っていたぞ、こちらへきたまえ」と、平佐中佐はつくえの前を指さした。

「ハッ」と、建川中尉はつくえの前へいつて、直立不動の姿勢をとった。

すると、平佐中佐はジツと建川中尉の顔を見つめながら、椅子を立ちあがった。手には野紙のつづりを持っている。

「建川中尉！」

「ハッ」

命令

「中尉にもっとも重大な命令をあたえる」

「……」建川中尉は瞳を輝かした。——もっとも重大な命令とはなにか？

「命令！」と、連隊長は野紙に書いてある命令文を、しずかに読みはじめた。中尉は一語も聞きもらすまいと耳をこらす。

中尉は下士以下五名の者を、中隊からえらびだし、明後一月九日早朝に出発せよ。遠く敵軍の後ろへ進み、つぎの任務を遂行すべし。

一、敵軍の動きつつある場所と兵力を搜索せよ。
二、敵軍の防御工事のありさまを詳細に探知せよ。
三、敵軍の鉄道運送のようす、および、列車にのせている物を調査せよ。
四、なしうればはるかに遠く撫順方面の敵軍と土地のようすを搜索せよ。

五、なしうれば敵の鉄道と電信線を破壊し、倉庫を焼きすてよ。

建川中尉は命令を聞きおわると、思わず武者ぶるいした。全身の熱血が叫びだした。

（ああおれは武人無上の名誉ある任務を受けた。この任務おれはまっとうしなければならぬ！）

生別はすなわち死別

風は蕭々として沙河にふきすさみ、星はさんさんとして満天にきらめいている。建川中尉はふるとき星をあおぎながら、連隊長室を出てきた。軍衣のふところには、いまさき連隊長からわたされた命令文が、武人のほまれを結晶したようにはいつている。

満州軍総司令官大山元帥より秋山騎兵団長へ、秋山騎兵団長より平佐連隊長へ、平佐連隊長より建川中尉のふところへ、その命令文がつたわってはいったのだ。——いまや日本軍あやうし！ この任務をまっとうして帰れば、その報告によって、総司令部は総攻撃の計画をきめるのだ。

（重い！ 重い！ もっとも重大な任務だ！）と、建川中尉は星をあおいで歩きながら、ジーンとくちびるをかみしめた。

そして、前の家屋へ帰つてくると、みながたずねる。

「建川、なんの用だった？」

「もちをもらってきたか？」

「どうした？ きさま、すごい顔をしとるぞ、どうした？」

「ウム」と、建川中尉は微笑すると、受けてきた命令を、みなに話した。すると、

「うらやましいなあ！」

「いいもちをもらってきやがったぞ、一生涯に二度ともらえないもちだぞ、建川！」

「じつに武運のいいやつだな。きさまは！ オイ、おれは今日から兵卒になっていいから、いっしょにおれを連れてゆけよ」

みながうらやましがっていきたがる。ゆく前途は万死の道だ。この夜、建川中尉は、任務の大いなることを思えば思うほどさすがに眠れなかった。

翌日、中尉は万死の道へ同行する五名の者を、中隊じゅうから選びだした。

騎兵軍曹

騎兵上等兵

騎兵上等兵

騎兵上等兵

騎兵一等卒

沼田一等卒

この沼田一等卒は、いつも中尉の世話をしている従卒だ。この五名、中尉とあわせて六人、これこそ生死を共にする主従である。五名がえらばれると、中隊じゅうの下士や上等兵や兵卒が、これまたうらやましがって、自分がいかれないのを、みんながくやしがる。だが、誰が見ても、この五名こそ、一騎当千の剛者なのだ。

騎兵の生命は馬だ。中尉は五名をえらぶと、つぎに五頭の駿馬をえらびだした。中に一頭の白馬を、わざと五頭のうちに入れた。露軍の騎兵には白馬が、かなり多くいる。そこで、遠くから見ると建川中尉以下六人も、露軍の斥候らしく見えるように、十分に用心して白馬を連れてゆくことにしたのだ。そして、この白馬には沼田一等卒が乗ることになった。

（この白馬は勇栗と名づけて、豊吉軍曹が現役にいたころ三年

間も乗りならした駿馬だった。戦線へきてからは、白馬は敵の目につきやすく不利なので、後方へまわされ、軍需品を輸送する兵が乗っていたものだ。——豊吉軍曹談

明日は出発だ。——生きてかえられる斥候ではない、と、だれもそう思つて、建川中尉のために、死別の宴を開いた。平佐連隊長は、大事にしていた魚のボラを二尾と、シャンパンの酒二本とを、その宴会の場へ送ってきた。宴会といつても、戦線のことだ、ご馳走なんかない。ただ戦士のま心で送る。ま心こそなによりのご馳走だ。

「あかねさすわが日の本の人という、人の中よりえらばれて……」

と、送別の琵琶歌をうたう者もいる。詩を吟ずる者もいる。みなが二度と会われないと思うと、涙をかくして建川中尉のために悲壮なさかずきをあげた。

「いよいよ翌朝は一月九日、決死大冒険へ六騎が出発の朝だ。茫々たる原野に大空晴れて、暁の光が、東の地平線を赤く染めている。建川中尉は武装に身をかためて、心しずかに外へ出てきた。そこに、中隊の兵卒が一人、向こうから走ってきた。左手に油紙の包みを持っている。立ちどまって敬礼すると、包みをさし出していった。

「建川中尉殿、小包がきました」

「なに、小包が？　ありがとう！」

（どこからきたのか？）と見ると、ああそれは、中尉のはるかな故郷……新潟にいられるおかあさまからの小包だった。

（おお、おかあさまからか……）

中尉の胸が熱くなった。押しただいて小包を開いてみると、寒さをしのぐ真綿、勝ち戦を祈るかとおぶし、苦勞をいたわる巻き煙草、一つとしておかあさまの愛のはいっていない物はな

い。中尉はその品々をながめながら、心の中でおかあさまを伏し拝んだ。そして吉田松陰の歌を思いだした。

親おもう心にまさる親ころ

今日の音ずれなんと聞くらん

（ああ、おかあさまは、ぼくの今日の出発を聞かれたら、この大いなる名誉を、どんなにかおよろこびくださるだろう！）と、中尉はおかあさまのおぼしめしの真綿を、背中へ巻いてありがたく着た。

そこに沼田一等卒が、中尉の乗馬をひいてきた。中尉はかつおぶしをくらのふくろへ入れた。巻き煙草を五名の部下へわけた。

いま一足のちがいで、おかあさまからの小包も、受けとれなかったのだ。じつにそれと思うと、（いよいよおかあさまとおわかれである。どうか、ごきげんよく！　ぼくの戦死の通知をごらんくださいましたら、美次が君国のためにたおれたことを、どうかおよろこびください！）と、中尉は一心に念じおわつて、愛馬にまたがった。

長蛇のごとき大騎兵团

連隊本部の前に、平佐連隊長をはじめ連隊の将卒が並んで、建川中尉以下六人の出発を見おくった。——見よ！　六人の凛然たる雄姿を！　道は遠く、任務は重く、敵地は深い、はたして幾人が生きてかえってくるだろうか？　肩をあげて軍刀をぬきはらった建川中尉は、五人の部下に号令した。

「ぬけ——刀！」

五人も馬上に軍刀のさやをはらって、右肩にかまえた。「東を向け！」中尉の声がまっ白な地上の霜にひびいた。

日いずる東の方には、かしこくも、大元帥陛下が在します。中尉以下六人は、東方へ馬首を並べた。

「ささげ——刀！」

ここにいま、はるかにささげまつる最敬礼、六人の軍刀が朝日に輝いて、忠烈の魂とおう。これを見おくる将卒は、建川中尉以下六人の心中を察して、涙をこぼす者もいた。

最敬礼をおわって、中尉は戦友のみなとわかれを告げた。

「いってまいります」

男子涙なきにあらず、別離のときにそそがず。六騎は馬首をめぐらして、肅々と西へ進んでいった。その影が朝日に長く地上へうつって、霜と赤土の上をすぎてゆく。平佐連隊長以下の者は、遠く六騎が見えなくなるまで見おくっていた。

味方の陣地を遠くはなれて、幾日も敵中へはいつてゆく斥候を、「挺進斥候」という。ぬきんでて進む特別の斥候だ。わが建川挺進斥候は、西へ……西へと進んでいった。この日は九里ばかり進んで「七台子」という村へ着いた。ここには味方の守備隊がいた。それでまず安心して眠れた。その翌日……一月十日、さらに西へ三里ばかり進むと、「媽々街」という町を通った。この町を、味方の歩兵が一中队で守っていた。が、いよいよこの「媽々街」が、戦線の西の端だ。ここから先は日本軍が一兵もいないと、守備隊長がいう。

建川挺進斥候は大冒険の第一歩へ進みでた。

媽々街の町を出て、南西へ二里ばかり「大蛇子」というすこい名の村へきかかると、村の中から、一人のおやじが、ふいに走ってきた。——なにか？　と思っっているうちに、中尉の馬の横へ走ってくると、息を切っていいだした。

「もし！　日本軍の士官さんは、どこへいまからいかっしゃる

だ？」

中尉はたづなをひかえて、おやじの顔を見つめた。いかにもしよじきそうなしわだらけの顔をしている。中尉は中国語でたずねかえた。

「この向こうに、大湾という村があるかね？」

「ありますだ。大湾へゆきなさるだか？」

「そうだ。露軍がいるのか、いないのか？」

「いないどころか。昨夜、大勢の露軍が、大湾や近くの村へとまりましたぞ、いくのはあぶないだ！」

「それは露軍の騎兵か？」

「ハア、騎兵だらう、馬に乗って、何万人といましただよ」

「そうか、よく知らしてくれた」

中尉は礼をいった。が、これははたして本当だろうか？　何万人という露軍の大騎兵团がわが戦線の西へまわってきたとすれば、非常なことである。その「大湾」まではすでに二里しかない。ま近いのだ。

「速歩！」　剛胆なる建川中尉は、五人に命令すると、馬を早めて大蛇子の村へ進んでいった。敵の大騎兵团をたしかめねばならぬ。

すると、村の中に一人の男が歩いている。中尉はその男のそばへ馬をとめてすぐたずねた。

「オイ、大湾になにかあったことはないかね？」

「ハア、べつになにかあったことはねえだよ」と、男は意外にも平気な顔をして答えた。

「そうか、露軍はいないのか？」

「そんなものは、一人もいねえや」

この男の答えは、まるでちがうのだ。前のおやじがうそをいったのか？　この男の方がうそか？　中尉は大湾のようすをた